
サイボーグ探偵真理絵 (Cyborg detective MARIE)

桂 ヒナギク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サイボーグ探偵真理絵 (Cyborg detective M
A R I E)

【Nコード】

N9016A

【作者名】

桂 ヒナギク

【あらすじ】

ウチはサイボーグ探偵の、奥村真理絵ちゃんや。サイボーグになる為に関西から東京に上京してきたねん。それから、水理高校っちゅう高校に普通に通ってるさかい、シブロクコンキューお願いしまんねん。

第1章：転校生（前書き）

この話は、黒崎 新一と奥村 真理絵が最初に出会った時の事を奥村 真理絵視点で書いています。

真理絵は、関西弁を喋る女の子と言う設定になってるんで、意味が解らない方はご容赦下さい。

第1章：転校生

「真理絵、起きなさい。」

母さんが私を起こす。

「ん？今何時なの？」

「8：30、学校遅れるよ？」

8：30か・・・ん、そらアカン！

転校初日に遅刻なんかしよったら、洒落ならへん。

ウチは飛び起きると、急いで支度をした。

「行ってきまあす。」

「御飯は！？」

「いらなあい！」

ウチはそう言い残し、走って学校へ向かった。

「はあ、はあ、はあ、はあ・・・。」

学校に着いた頃、ウチは息を切らしていた。

おっと、はよ校長室行かなアカン。

靴を履き替えると、ウチは校長室に向かった。

コンコン

戸を叩き、

「失礼しまあす。」

と、校長室に入った。

「奥村さんだね。まあ、そこに座りたまえ。」

ウチは、校長の指示に従って椅子に腰を掛けた。

「じゃ、改めて自己紹介を。」

「はい。ウチの・・・。」

アカンアカン、標準語や。

「ん？」

あんはん、関西の人やろか？」

いきなり関西弁で話す校長。

「あの、もしかして、校長先生も大阪の人なん？」

「そうわ。ワイも大阪出身や。やから、普通に話してもええで。」

「そうやろか。では、改めて自己紹介をしまんねん。」

ウチの名前は、奥村 真理絵や。今月からお世話になるさかい。シブクロンキューお願いしまんねん。」

「はい、それやあ、職員室に行つて、大山先生にこれを渡してくれへんかの。」

そう言つて、校長はウチに書類らしきものを渡した。

ウチはそれを受け取ると、校長に一言言い、職員室へと向かった。

「失礼しまんねん。」

ウチはそう言つて、職員室に入った。

皆はん、目を丸くして驚いた。

そりや、関西弁をしゃべる女の子が、いきなり職員室に入ってきたんやから、驚くのも無理はないちゅうわけや。

ウチは、大山先生を見つけると、その前に行った。

「大山先生、校長先生から書類預かってきたんや。」

アカン、標準語を使うのを忘れて普通に話してしもた。

大山先生は目を丸くした。

アカンアカン、標準語や標準語。

「あ、すみません。校長先生から書類を預かってきました。」

「あ、ど、どうも。」

大山先生はそう言つて、書類を受け取った。

「えっと、奥村さんだよね。これから、教室に行くから付いて来て。」

「

そう言つて、大山先生は立ち上がり、教室へと向かった。

同じくウチも、大山先生の後を追ひ、教室へ向かった。

ガラガラガラ！

大山先生が扉を開けて中に入る。

「起立、気を付け、礼、着席。」

の号令が掛かる。

「えーと、今日は転校生を紹介します。」

大山先生がそう言うと、教室が一斉に騒がしくなった。

「誰だろう？」

とか、

「女子かな？」

とか、

「可愛い子が良いなあ。」

と、色々な言葉が聞こえてくる。

「はい、皆、静かに！あまり五月蠅いと、入るにも入れなくなってしまうですよ。」

するとどうだろうか。

一瞬して、生徒が静かになった。

「す、凄っ。」

ウチは囁いたが、誰も聞いてはくれなかった。

「どうぞ。」

大山先生が言った。

ウチはゆっくり教室に入った。

「うほっ！めっちゃ可愛い！」

「俺、君に惚れた！俺の愛を受け取ってえ！」

男子共の光る眼差しがウチを照らす。

その時、一人の男子がこう言った。

「おい、てめえら、朝っぱらから五月蠅え。静かにしろ。」

そいつは、サングラスを掛け、制服を着用せず、派手な服装をしていた。俗に言う、不良だろう。

ウチがそいつの事を見つめていると、そいつが睨み付けて来た。ウチは直ぐに目を逸らした。

「亀山、怯えてんだろ？」

そいつの隣にいた男が言った。

「どうやら、あの不良は亀山と言うらしい。」

「何だとてもえ！」

亀山は立ち上がると、男に殴りかかった。

男は亀山の腕を掴むと、立ち上がって背負い投げをした。

「あの、これは、一体、どういう歓迎の仕方なんでしょう？」

ウチはボソッと呟いた。

「これは歓迎じゃない……。」

大山先生は呆れた様子で言った。

「黒崎、五月蠅いからそいつ黙らせといて。」

大山先生はそう言った。

ボガッ、ボガッ、ボガッ、と数回音が鳴ると、亀山と言う男はその場で気絶した。

な、何やのこのクラス？

ウチ、こないなとこでホンマにやってけるんやろか？

「はい、じゃあ、静かになった所で、自己紹介お願いね。」

大山先生が黒板に、ウチの名を書きながら言った。

「ウチの名は……。」

アカン、標準語や。

「どうした？緊張してるのかな？」

えっと、彼女は……。」

大山先生が言いかけると、ウチが口を開いた。

「ウチ、やのうて、私は、奥村 真理絵。」

大阪の学校から来ました。半端な時期だけど、シブ……宜しくお願いします。」

「そう言う事だ。皆、仲良くしろよ。」

大山先生がそう言うのと、皆が一斉に返事をした。

「じゃあ、奥村さんは、あの席に座ってくれるかな。」

大山先生は、亀山を気絶させた男の隣の席を指差した。

ウチはゆつくりと、その席に向かった。途中、数人の男子から鋭い視線を感じたが、何とか席に座る事が出来た。

「お、奥村……ま、真理絵です。よ、宜しくお願いします。」
ウチは亀山を気絶させた男に声を掛けた。

「黒崎 新一だ。」

男は名乗ると、鞆を持って教室を出て行こうとした。

「黒崎、授業始めるぞ？」

「帰る。」

黒崎はそう言い残し、教室を出て行ってしまった。

「お、奥村さん、悪いんだけど、連れ戻して来てくれないかな？」
大山先生に頼まれたウチは、黒崎を追いかけた。

「黒崎はん、ちょっと待ってくれへん？」

ウチは黒崎に声を掛けたが、黒崎は無視して玄関まで行ってしまった。

しゃーないので、ウチも彼の後を追った。

第1章：転校生（後書き）

「シブロクコンキュー」って、「宜しく」って事らしいです。
ん？

事件は次回辺りですよ。

レストラン殺人事件（前書き）

予定通り、事件発生です。

レストラン殺人事件

ウチは靴を履き、黒崎を追い掛けた。
途中まで歩くと、黒崎は足を止めた。

「何故付いてくる？」

黒崎は聞いた。

な、何て答えよ？

先生に呼び戻して来いって言われた事言っても、シカトされるだけやろうし・・・。

「ウチ、黒崎はんの家って、何処にあるのかなと気にのうて。」

うわー、何言うとるんやろ、ウチ。

「来るか？」

「え、ええの！？」

「ああ。どうせ、帰っても暇だし、話し相手が欲しかった所なんだ。」

「せやな、ウチも暇やから、ちーとばかしお邪魔させて貰お。」

な、何言うてんやろ？ウチ、初対面の人の家には行かない主義なんやけど・・・。

でも、何でこないにも行きたがるんやろ？

それに、何やろか、この気持ち。胸がドキドキするねん。

その時のウチはまだ、その理由に気が付いておらんかった。

「そうと決まれば、はよ行くで。」

ウチはテクテクと、黒崎を通り越して歩いていった。

「何してんねん？はよ行くで？」

「いや、あの、家、此処なんだけど？」

黒崎は一軒の小さな家を指差した。

「せ、せやの？」

ウチは焦って引き返した。

黒崎はキーを取り出すと、鍵を開けて中に入った。

「なあ、黒崎はん？」

「何だ？」

「親っておらへんの？」

いきなり、何聞いてるんやろ？

「いないんだ・・・。」

黒崎は俯いて暗くなった。

「黒崎はん、どないしたん？」

「い、いや、何でも無え。」

黒崎はそう言って、鞆を床に置いた。同時に、ウチの腹の虫が、グ
ー、と鳴いた。

あまりの恥ずかしさに、ウチは赤面した。

「お前、腹減ってんのか？」

ウチはその言葉に頷いた。

「じゃ、何か食べに行くか？」

「え、ええの！？」

「良いぜ、別に。」

今日は転校の祝いだ。奢ってやるから好きなだけ食べな。」

黒崎は微笑みながら言った。

またや。またさっきのドキドキや。

ま、そないな事どうでもええわ。

今は飯や飯！

ウチは黒崎と一緒に、近くのレストランへ向かった。

「お前の名前、奥村だっけ？」

「そうやけど？」

「ふーん。」

と、黒崎は鼻を鳴らした。

「それだけなの？」

ウチはそう言ったが、黒崎の耳には届かなかった。

そうこうしている内に、ウチらはレストランに到着した。

ウチらは早速中に入った。

店内は、わりと広く、お昼前なのか、客も沢山いた。

「何名様ですか？」

ウェイトレスが聞く。

「2名。」

黒崎が言うと、ウェイトレスは空いている席へと案内した。

「少々お待ち下さい。」

ウェイトレスはそう言い残し、厨房の方へと入って行くと、直ぐにお水を持って戻って来た。

ウェイトレスは丁寧に、おぼんの上からお水とお手ふきを置く。

「メニューはそちらにありますので、お決まりでしたらお呼び下さい。」

ウェイトレスは、テーブルの脇にあったメニューを差すと、その場を去った。

ウチはメニューを取って開くと、お目当ての物を探した。

お、あるやんあるやん。ウチの大好物が。

「黒崎はんは、もう、決めたんやか？」

「ああ。」

「ほな呼ぶで。」

すみまへーん。」

ウチは店員を呼んだ。

店員は、声に気付くと、直ぐにやってきた。

「ご注文はお決まりでしょうか？」

と聞く、先ほどのウェイトレス。

「ネギトロぶっかけお願いしまんねん。」

ウェイトレスは、手に持った機械に入力した。

「じゃ、俺は大辛に挑戦しようかな。」

「大辛でございますね。」

こちらは、お汁つゆを含め、全部完食致しますと、料金が半額になると言うサービスを行っています。また、激辛を完食……。」

ウェイトレスが途中まで言うと、

「説明はもう良い。」

と、黒崎が言った。

ウェイトレスは少し戸惑ったが、直ぐに冷静さを取り戻した。

「えっと、ネギトロぶっかけがお一つ、大辛ラーメンがお一つ、以上で宜しいですね？」

「ああ。」

「畏まりました。^{かしこ}少々お待ち下さい。」

ウェイトレスは、ニツコリと微笑みながら言い、厨房へと向かった。その際、ウチには聞こえた。

「何だよあのクソ餓鬼。」

と言う囁き声が。

まあ、多分・・・多分やで、ウチもようしらんが多分気のせいやろ。

「おい、聞こえてるぞ。」

黒崎がウェイトレスに向かって言い放った。

ウェイトレスは、それに反応し、びくっとして振り向いた。

「お、お客様？」

私は、『何だよあのクソ餓鬼』なんて一言も言ってませんわ。」

そう言って、向き直ると、歩き出した。

「待て。」

黒崎が立ち上がってウェイトレスの方を掴んだ。

「な、な、な、何でしょうか、お客様？」

ウェイトレスが冷や汗をダラダラと垂らした。

「何で言った筈の無いお前がそれを知っているんだ？」

「いやー、何故でしょうか？」

「答えられないなら俺が代わりに答えよう。お前が俺に自分で言っただからだ。」

嘘を吐くなら、もっとバレ難い嘘を吐け。」

そう言くと、黒崎は席に戻った。

何やのこの人？

ウチはそう思った。

ウェイトレスは、怯えながら厨房へ入っていった。

「く、黒崎はん、ウチ、トイレ言ってきまんねん。」

そう言っつて、ウチは取り敢えずその場を離れた。

その辺彷徨くのもあれやし、ホンマにトイレ行こか。

ウチはホンマにトイレへ行つた。

「きゃああああ！」

トイレに入るなり、ウチは大きな悲鳴をあげた。

なんと、目の前に、胸に包丁が突き刺さった店員が倒れているでは無いのか。

ウチは腰を抜き、動けなくなった。

「どうした!？」

悲鳴を聞いた黒崎がウチの下へ駆け付けて来た。

「あ・・・あ・・・ああ・・・あ。」

ウチは声にもならない呻き声を出しながら、目の前にあるそれを指差した。

黒崎はそれを見ると、素早く駆け寄って様子確かめた。

「駄目だ、亡くなってる。」

亡くなってるって、ホンマやの、黒崎はん？

レストラン殺人事件（後書き）

この事件、真理絵に解かせるか？

取調室（前書き）

子供には刺激が強すぎる暴力行為が含まれています。

子供は絶対に読まないで下さい。

と言っても、絶対読むよな。

読むと言われると読みたくなるのが人間の悪い癖やからな。読みたい奴は勝手に読め。今回は目を瞑ってやる！

取調室

本日の昼、レストランの女子トイレで、女性の遺体が発見された。被害者は、川村 美紀、19歳。死因は、胸に刺さった包丁による刺殺。

彼女は、この店でアルバイトをしている大学生であり、回りに恨む人間などいなかったと言う。

第1発見者は、ウチや。今、警察の事情聴取を受けとる所や。

「せやから、ウチは殺してへん言うとるやろ！」

ウチは言い寄る刑事にそう言っただけや。

が、刑事は一向に聞き入れてはくれず。

「やれやれ・・・。吐きませんね、先輩。どうします？」

刑事が上司に相談をした。

「こうすれば嫌でも吐くだろう。」

先輩刑事は、手を握って拳を作った。

ま、まさかウチを殴るつもりやないよね？

そのまさかだった。先輩刑事は、ストレートに頬を殴り付けてきよった。

ガスッ！

ウチはあまりの痛さに涙した。

「うえええええん！」

しまいには泣き出す始末。

「先輩、いくらなんでも、酷すぎますよ！」

「ふっ、どうせ、ただの泣き真似だ。数回叩きや観念して吐くだろ。」

そう言って、再び殴って来た。

ガスッ！

「うえええええええん！」

ウチは更に泣き出す。

「泣いた振りしたって駄目だ。全て解ってんだからな。」
ガスッ!

再び殴る刑事。

おかげでウチの顔は腫れと痣だらけや。ああ、ウチの美貌が!?
これでお嫁行けへんなってしもうた。

もう許さへんで、ウチは!

ウチは泣くのをやめ、刑事の方を見つめてやった。

「ほお、吐く気になったか。」

大きな勘違い。ウチは今、目の前の刑事をのしてやろと思っとる所や。

ウチは拳を作り、目の前の刑事の腹に正拳付きを叩き込んだ。

ズガンッ!

「うっ!？」

目の前は刑事は、腹を押さえてそのまま倒れて、気絶してしもうた。

「せ、先輩!？」

後輩刑事が呼びかける。

が、刑事の反応は無かった。

ウチのせいや。ウチが本気でやってしもうたばかりに。

「入るぞ。」

あ、黒崎はんや。助けに来てくれたんや。

ウチは喜びで一杯やった。

ガッチャッ

黒崎がドアを開けて入って来た。

「な、何だ? この、もの凄い重い空気は?

てか、奥村、何でそんな痣だらけなんだ?」

「この、倒れとる刑事、ウチの事殴ってきたんや。せやから、ウチがブチキレてのしてやったんや。」

「良くやった。」

黒崎はウチの頭を撫でて褒め、

「実は、この刑事には俺も散々な目に遭わされて、ぶちのめしてや

りたいと思っていたんだ。」

と、付け足した。

「良くやったじゃない！これは公務執行妨害だぞ！」

後輩刑事が突っ込んだ。

「こんななるまで殴り続けたのは何処のどいつだ？」

黒崎が言うと、後輩刑事は黙り込んで何も言わん様になってしまった。

「う・・・うつ、う。」

先輩刑事が目を覚まして起きあがった。

「てめえ？」

黒崎が起きあがった刑事の胸倉を掴んだ。

「お、お前は！？」

驚く先輩刑事。

「てめえが何したのか解ってんのか？」

黒崎は笑った顔を引きつらせた表情をした。

「お前が何でこんな所にいるんだ！？」

「関係ねえだろてめえにはよう？」

先ず、てめえには奥村に謝って貰う。」

黒崎は、眉間にしわをよせ、恐い顔で言った。

が、先輩刑事は微動だにしない。

「ほお、謝る気ゼロか。」

そう言い、一息吐くと、黒崎は先輩刑事の腹をぶん殴った。

「ぐふっ！」

「せ、先輩！？」

後輩刑事は、止めに入ろうとしたが、恐くて動くことが出来なかった。

「俺はお前が『謝る』と言うまでやる。」

そう言って、黒崎は先輩刑事の腹を殴り続けた。

ズシンッ、ズシンッ、ズシンッ、ズシンッ！

腹を殴る音が鳴ると同時に、

「ぐっ・・・ぐっ・・・ぐっ・・・ぐっ！」

と、先輩刑事の悲痛な呻き声が聞こえる。

そないな事より、ウチは今、凄く気にしとる事がある。

それは、外で見張つとる刑事がに止めに入ってこないと言う事や。ドラマとかやと、良くあるやろ？

取調室で何ぞあると、見張りの刑事が取調室に入るっちゅうこと。それがあらへんのや。

一体、どないしたんやろか？

ズシンッ！

「ぐふっ！」

黒崎の腹パンチは未だに続いていた。

「お前、いい加減に謝らんと、死ぬぜ？」

ズシンッ！

「俺が謝る・・・ぐっ、なんて事・・・ぐっ、する訳・・・ぐっ、無いだろ・・・ぐっ！」

「なら俺はやめない。」

ズシンッ！

黒崎のパンチが再び腹に入って音を響かせる。

「黒崎はん、もうええわ。ウチ、もう充分や。」

ウチは黒崎を止める。

「そうか。だが、これでは俺の気が済まない。絶対謝らせてやるからな。」

「く、黒崎はん・・・。」

ドクンッ、ドクンッ！

ウチの心臓の鼓動が高鳴る。

またや、またさっきのドキドキや。

何なんやろ、これ？

ウチは高鳴る胸に手を当てた。

ズシンッ！

「刑事さんよ、いい加減気い変えて謝ったらどうだ？」

黒崎は殴りながら言う。

ガタン！

「やめろ！」

そこへ突然、一人の刑事が取調室に入ってきた。

「け、警部……。助けて下さい。」

先輩刑事は言った。

「黒崎、もうやめるんだ！」

警部は黒崎に言った。

「あんたか。悪いが、こいつが謝るまでやめねえぜ、俺は……。」

「黒崎、何が不満なんだ！？」

警部は黒崎に怒鳴り散らす。

「その子の顔を良くみてしろ。」

そう言われ、警部はウチの顔を見た。

「なっ、酷い顔だな……。」

ズシンッ！

「だろ？こいつ、そんななるまで殴り続けたんだぞ。」

黒崎は先輩刑事を殴りながら言った。

「状況は解った。だが、今はそんな時じゃない。兎に角そいつを離せ。」

黒崎は溜め息を付く。

「わあったよ。あんたに免じて今日はこのぐらいにしといてやる。」

黒崎はそう言って、先輩刑事の胸倉を放すと、腹に蹴りを入れた。

先輩刑事は吹っ飛ぶと、そのまま壁に当たり、呻き声を発して倒れた。

「黒崎、事件の全容を話してくれ。」

黒崎は、警部に事件の全容を話した。

「成る程、それで第一発見者のこの子がこんな顔になった、と。

けど、まあ、あんたも良く事件に遭遇するな。それより、その現場に行ってみよう。」

警部はそう言った後、

「君も来てくれるね？」

と、ウチを見て付け足した。
ウチは頷くと、三人で現場へ戻った。

取調室（後書き）

真理絵のぼやき

こないなやり方でホンマにこの小説大丈夫なんやろか？

にしても、今の新一君と、初めて会った時の新一君とはかなり性格が違う・・・。

まるで、別人の様な・・・。

作者から

ええ、これで4本目となりますが、この調子で続くとは到底思えません。果たしてこの調子で最終回を迎える事が出来るのでしょうか？

「最終回を迎えてくれへんとウチが困る！」

ボガッ！

奥村が作者を殴る。

ぐはっ！

（この、暴力女目・・・。）

第2の事件、速攻解決！（前書き）

速攻解決します。

また、後半はかなり盛り上がるので、期待してして下さい。

第2の事件、速攻解決!

警視庁を後にしたウチら三人は、事件現場へとやって来た。

「黒崎、遺体は入って直ぐの所にあっただんな？」

「触れて確認したから間違い無い。」

「ふ、触れただと!？」

「ああ。」

「そ、それで、体温はどうだった？」

「まだ温かったぜ。」

「ふむ、殺されたばかりだな。」

二人は遺体の状況について語り合った。

何やのこの人達は？

ウチ、全然ついて行けへんのやけど？

「発見した時間は何時だ？」

「それやったらウチ知ってる。12..00をちょっと過ぎた頃や。」

「んじゃ、12..00と・・・。」

警部は手帳にメモをした。

へえ、警察って些細な事までメモするんや。ウチ、初めて知っ

たわ。

って、ウチを無視して何処行くねん!？

ウチは二人を追いかけた。

どうやらこの二人、店員の話の聞きに行くみたいやな。

「すいません。」

警部はテーブルを拭いていたウェイトレスに、警察手帳を見せながら声を掛けた。

「ご苦勞様です。」

ウェイトレスは振り向くと会釈をした。

「あの、昨日の事件の事で少々お話を聞きたいのですが、お時間は宜しいでしょうか？」

「すみません、私時間が無いので、失礼します。」

そう言って会釈をすると、ウェイトレスは焦る様に、急いでその場を去った。

ウチは咄嗟に名札を見た。

金島 かなしま 香織 かおり、そう書いてあった。

何やろ、あの人？

「しゃーねー、あいつは後回しにして他の人に聞かか。」

警部はそう言った。

「ああ。」

黒崎はそれに賛成した。

ウチらは、レジの前にいる男の人の所へ行った。

警部は、その人に警察手帳を見せた。

「昨日の事件の事で、少々お話を伺い……。」

警部が途中まで言うのと、男は忙しいと言い残して去ってしまった。

アカン、名札見そびれてしまうたわ。

やけど、あの人もそうやけど、今の人もめっちゃ怪しいで。

「あ、すみません。」

警部は偶然通りかかったウェイターに声を掛け、警察手帳を見せた。

「はあ、警察の方ですか。」

「あの、昨日の事件の事でお伺いしたいのですが、お時間の方は宜しいでしょうか？」

「ええ、構いませんけど。」

警部は手帳を開く。

「貴方のお名前を教えてください。」

ウェイターの名前は、小島 こじま 聡 さとし。

彼が言うには、事件当時の被害者は、殺される、と何度も連呼して怯えていたらしい。

また、小島は何で怯えているのかを聞いたが、被害者は理由を教えられなかったと言う。

「成る程。他に変わった所とかは？」

「いいえ、特には・・・あっ！」

「どうかしました？」

「そう言えば、この間、大島君と喧嘩をしました。

大島君、彼女にこう言っただけですよ、『殺してやる』って。」

「大島君とは？」

「大島 玲次れいじ、さっきレジの前にいた男だよ。慌てて逃げたみたいだから、何か隠してるんじゃないかな？」

「彼、今どこにいるか解ります？」

「そうだな・・・。」

小島は少し考えた後、口を開いた。

「多分、トイレにいると思いますよ？あいつ、都合が悪くなると、トイレに立てこもっちゃうんです。」

「そうですか。ありがとうございます。」

警部は会釈をした。

「行ってみるか？」

黒崎は警部に言った。

「行くでしょ、普通。」

ウチらは、大島が立てこもつとるつちゅう、トイレへと足を運んだ。男子トイレの個室に誰かが潜んでいる気配がする・・・。

コンコン！

「大島さん、いるんでしょ、出て来て下さい。」

警部は話を掛ける。

コンコン！

「大島さん？」

返事が無い・・・。

「返事が無いな・・・。」

警部は黒崎に顔を向けて言う。

ウチは気になりよったさかい、登って個室の中を確認した。ん、死んどる！

大島は、個室の中で洋式の便器に座って息絶えていた。

「奥村、中の様子どうなってる？」

「大島はん、中で亡くのうとるねん。」

「何！？」

「本当か！？」

「ホンマや。」

今開けたるさかい、ちーとばかり待っててくれへんか？」

ウチは個室の壁を乗り越えて中に入った。

何やろ、この甘酸っぱい臭い？

ウチは臭いの元を辿った。

どうやら臭いは大島の口からするみたいだ。

こりゃ青酸カリやな。

アカン、鍵開けんと・・・。

ウチは横に動かして開閉する鍵に触れた。

ん、何や？

糸が絡まっとるけど？

ウチは糸を回収した。

他に何か怪しいもんあらへんかな？

ウチは遺体のポケットや、貯水タンクの中とかをあさってみた。

何もあらへんなあ・・・。

「おい、何やってるんだ？早く開けんか？」

アカン、開けるの忘れとった。

ん、壁に針が一本通るくらいちっこい穴が開いとるで。

アカン、雑念は棄てるねん。

ガチャ！

ウチは鍵を開け、扉を開いて個室を出た。

入れ替わりに、警部が手袋をして個室に入る。

「アーモンド臭、遺体に目だった外傷無しか。こりゃ自殺だな。」

ホンマにそうやろか？遺書もあらへんし、青酸カリの容器も見あた
らへん。自殺にしてはおかしすぎや。

待てよ、大島はんが毒だけを持ち込んだとするやろ、ほしたら、何

とでも説明が付く。

やけど、そないにまで他殺に見せかけたがるっちゅう事は、どういう訳やろか？

「ん、壁に穴が開いてるな。」

お、警部はん、壁の穴に気付いたな。

「どうせ餓鬼の悪戯だろ？」

黒崎が言うた。

「そうか。」

納得する警部。

アンタらアホやな。その穴は、糸を・・・！？

そうか、そうやったんか！密室の謎も、第1の殺人も、大島はんの事も、ぜええんぶ一つ残らず解ったで！

二人ともそこで大人しく待つとれ！悪いけど、手柄はウチが独り占めや！

ウチは先ほど話をした小島に会いに行った。

「あ、さっきの。どうしたんだい？」

ウチはニヤニヤしながら小島の顔を見つめた。

「な、何だい、そんなニヤニヤして？」

僕の顔に何か付いてるかい？」

「小島はん、ウチ、ぜええんぶ一つ残らず解ったで！」

「な、何の事だい？」

「昨日、川村 美紀はん殺害したんと、さっきトイレで大島 玲次はん殺害した真犯人の事や！」

とぼけさせたりはせえへんで！」

「な、何が言いたいんだい、君は？」

小島に焦りの表情が浮かぶ。

「ゴチャゴチャ言うところの場合やあれへん、要はアンタが川村はんと小島はんを殺害した犯人やと言っとるんや！」

「ハッハッハ、それは面白い。是非聞かせて貰おう。」

小島は余裕の満面で言った。

「良いやろ、何度でも言うたるわ！」

アンタは先ず、男子トイレに行き、川村はんが来よって女子トイレに入るのを待った。

ほんで、頃合い見図り、女子トイレに入って川村はんの胸に包丁刺して刺殺したっちゅう訳や！

次に小島はんの件や！

アンタは小島はんに予め、『警察はあんたに疑いの目を掛けてる、警察が来たらトイレに来い』と、伝えておき、巧く小島はんをトイレに呼び出した。

ほんでアンタは、隠し持っていたナイフか何かを小島はんに突き付け、『これを飲め』と青酸カリのジュースかなんかを飲ませたんや。その後、アンタは小島はんの遺体を男子トイレの洋式便器に座らせ、壁に針一本通せるくらいの穴を開け、細い糸を二重にして鍵に引っかけ、両端をその穴に通したんや。

ほんでドア閉めて糸を引っ張れば、なあんもせんとかッたらかしといても鍵が掛かりよって密室が出来上がる訳や！

そんな時の糸の切れ端が、何でやらかウチもよー知らんが、鍵に引っ掛かってたで！」

ウチ例の糸をポケットから出した。

「なあんも確認せんとそのままホッたらかしにしようたのが仇になったなあ！」

「ほお、全て完璧だと思ったが、思わぬ所にミスがあったか。

あんた、何で俺が犯人だと解ったんだ？」

「オンナのカンや！」

「ふっ、まあ良い。全て知られたからには、此处で死んで貰おう。」
そう言っつて、小島はウチの首を掴もうとした。

「触れんじゃねえよ、卑劣な極悪外道があ！」

ウチは小島の腹を思い切り蹴飛ばしてやった。

「ってえな！」

小島は、ポケットからナイフを取りだし、シャキン、と刃を出した。

小島は右手でそれをウチの首に突き付ける。

「そないなもんでウチを脅せると言うたら大間違いや!」

ウチは大島が握つとるナイフの刃を左手で思い切り握った。手の平から血が出たが、これで刺される心配は無い。

小島はナイフを引っ張った。

が、ウチは力を入れて動かへん様に固定した。

「な、何だこの力!? 凄い力だ! とても、女とは思えん!」

「関西の女なめたらアカンでえ!」

ウチは右手で小島の右手首をチョップ。

ボキッ!

小島の右手首の骨が折れた。

「がああっ!」

小島は叫びながら右手首を抑えた。

「くっ、クソ! 覚えてやがれ!」

小島はそう言って、その場から逃げ出した。

「逃がすかよ!」

ウチは偶々手に持っていたナイフを、逃げる小島の後頭部目掛けて思い切り蹴り飛ばした。

ズシューン!

ナイフが空気の摩擦で燃えながらもの凄いスピードで飛んでいき、熱で球体に変化して小島の後頭部に当たった。

「ぐはっ!」

小島は気絶してその場に倒れた。

ウチが犯人成敗した後、

「今凄い音がしたぞ!」

と、黒崎と警部が駆けつけてきた。

「こ、小島さん!」

警部は小島に駆け寄った。

「警部はん、そいつ真犯人やで。」

「な、何だと!? てか、何故気絶してるんだ!」

「襲ってきよったからウチがのしたんや。

そないな事より、はよ手錠掛けとかんと、小島はん逃げてまうで？」

「あ、ああ。」

警部は手錠を出し、小島の手首に手錠を掛けた。

「ん、右手首の骨が折れとる。」

警部は手錠を掛ける際に呟いた。

「奥村！手、怪我してんじゃねえか！？」

「これ？」

小島はんがナイフ突き付けた時に思い切り握ってやったさかい、切れてしもたんや。」

「大丈夫かよ？」

「このぐらいウチは平気や。」

「で、肝心のナイフは？」

「あれや。」

ウチは金属のボールを指差した。

「何だ、ただのボールじゃないか。」

黒崎はボールに触ろうとした。

「熱いから触んなアホ！」

ウチは黒崎にそう言った。

が、時既に遅し、黒崎はボールに触れていた。

「あっちいいいい！」

黒崎は手に全治一ヶ月の酷い火傷を負ってしもうた。

「せやから言ったのに・・・。」

ウチはボソッと呟いた。

これで、ウチが新一君と初めて会った時の話は終わりや。

せやけど、まだまだウチの体験話は続くんや。

次回もお楽しみにしいや。

ほななあ。

第2の事件、速攻解決！（後書き）

真理絵のぼろり

もの凄いど迫力やわ。

もう、ウチは何も言う事あらへん。

作者から

最後はもの凄い迫力でした。

名○○コ○ン（○多過ぎて解らんわ！）のキッ○力増強シューズより威力あるんじゃないんでしょうか？

次回もお楽しみに。

ほなさいなら。

第2章：秋（前書き）

今の所、事件の臭いがしません。

第2章：秋

秋になって、夏休みも終わり、新学期が始まった。

秋と言えば、色々な秋がある。

食欲の秋、スポーツの秋、勉強の秋などなど。

やけど、ウチは秋が一番嫌いや。

何故って、休みが少ないからや。

ゴチャゴチャ言うてる場合やあれへん、要は秋休みがあらへんと言
う事や。

「奥村さーん！」

サッカーをやっていた、クラスメイトの、2枚目の顔の男の子が、
ウチに声を掛けた。

彼の名は、佐藤 太一。

大のサッカー好きなサッカー少年だ。

「佐藤はん、どないしたん!？」

ウチは離れた所にいる佐藤に大きな声で問掛けた。

「こっち負けそうなんだあ! だから、助っ人として入ってよお!」

「O・K・ 今行くでえ!」

ウチは助っ人して、佐藤のいるチームに入った。

言うとかくが、ウチが入ったチームは、絶対に負ける事が出来なくな
ってまうんや。

「真理絵ちゃん、例のあれを見せてやってよ。」

「O・K・」

ウチは例のシュートを放つ事にした。

「行つけー、ストップシュート!」

説明しよう。

ストップシュートとは、相手のチームが守備をするゴールに、目にも留まらぬスピード（秒速30万km）でシュートを決めるサイボ

ーグの真理絵にしか出来ない超必殺技である。

この技で放たれたボールは、通常の肉眼では捕える事が出来ない。因みに、前回犯人を捕まえる時に放ったシュートは、フレイムシュート、と言うシュートで、ボールが時速300kmで、摩擦熱の影響で燃えながら吹っ飛ぶ必殺技だ。

また、この技で放たれたボールは、表面の温度が太陽と同じ温度になる為、吹っ飛ばすものが金属なら、一瞬で溶かして形状を変える事が出来る。

以上、作者からでした。

ウチが放ったシュートは、目にも留まらぬスピードで相手キーパーのいるゴールに入った。

「すっげー！真理絵ちゃんのシュート、いつ見てもすげえ！あんなの、絶対に止められないよ！」

相手チームの一人が言った。

「お、奥村師匠！今度、俺にそのシュート伝授して下さい！」

「修行は厳しいで？今までウチのシュートを会得しようとして死んだもんが仰山おるで？」

ウチはマジっぽい冗談を言った。

「や、やっぱやめとく。」

「ハハハハ。」

ウチが笑うと、全員が釣られて笑った。

「ほな、ウチは抜けさせて貰うさかい、後は頑張りや。」

そい言うと、ウチはチームを抜けた。

さて、何しようか？

って、やることあらへんし、教室行こか。

ウチは教室へ戻った。

黒崎家再び（前書き）

ど派手なアクションをどうぞ。

黒崎家再び

「標準語プログラムインストール中です。暫くお待ち下さい。」

部屋中にパソコンの音声・・・じゃなくて、サイボーグである私から音声が響いた。

今、標準語プログラムをインストールしている所。

「インストールが完了しました。ディスクを取りだして下さい。」
どうやら終わったみたいだ。

「カシャ！」

私は耳形のディスク挿入口を開いて取りだした。

（そうだ、ついでだからチェックディスクでエラーが無いか調べておこう。）

私は机の引き出しからチェックディスクを引っ張り出して耳にセツトした。

「カシャ！」

挿入口が閉まる。

「グイーン」

ディスクが回り出した。

「チェックディスク起動、作業が終了するまでディスクを取り出さないで下さい。」

「グイーン、グイングイン、ビビ、ビーーーーー、ピヒューン」

「作業が終了しました。1個のエラーが検出されました。CPUの処理速度が低下しています。処理速度をUPします。」

「グイーン、グイン、グイグイ、ビーーーーー、ピヒューン」

「作業が終了しました。ディスクを取りだして下さい。」

「カシャ！」

挿入口が開いた。

私はディスクを取りだして挿入口を閉じた。

（さて、一通り終わったし、新一君誘って遊びに行こうかな。）

私は携帯を取り出すと、新一君の携帯に電話を掛けた。

「もしもし、新一君？私、真理絵だよ。」

『はぁ？お前奥村じゃねえだろ。奥村は標準語喋んねえぜ。』

「鈍感だな、お前。ウチや、奥村や。これで文句あらへんやろ？」

『何だ、奥村か。』

「だから、最初からそう言ってるだろ・・・。」

『お前、標準語喋る様になってから性格も変わったか？』

「う、五月蠅えよ。と、兎に角、お前今日暇なら私の家来い。」

『誰が行くかよ。』

「来い。来なきゃ今すぐお前の家行つてぶっ飛ばす。」

「ぶつ、ツー、ツー、ツー、ツー」

（切りやがったな。よーし、此処はひとまず武力行使だ。）

そう思った私は、新一君の家に行った。

「ピンポーン！」

チャイムを鳴らす。

「ガチャ」

新一君が家から出て来た。

「な、何で来たんだよ？」

「それは新一君に会いたかったから。」

そう言つて、私は新一君にしがみついた。

「は、離れろよ。恥ずかしいだろ？」

新一君は赤面しながら言った。

「わ、テレてやんの。」

新一君は鼻を鳴らし、

「離れろよ。」

と、私を突き放そうとした。

（無駄無駄、私はサイボーグだから、普通の人の力じゃ離れないよ。）

「な、何で離れねえんだよクソ！」

新一君は踏ん張った。

「新一君がどっか遊びに連れてってくれるまで私は離れないよ。」

「嫌だよ。俺は今忙しいんだ！おめえに構ってる暇なんかねえの！」

「じゃあ、絶対離れない！」

私は新一君をぎゅっと締め付けた。

「い、いてててて！いてえって！離せこら！死ぬ死ぬ！」

「ガチャ」

「もう、何よ！？朝から騒々しいわねえ！」

新一君の家から一人の少女が出て来た。

「あ、アンタ、何やっとなの？」

「お、おう、綾。丁度良い所に来た。こいつどうにかしてくれ！」

「嫌よ、面倒臭い。」

てか、その子誰？」

「ああ？この間転校して来た奴だよ！同じクラスの！」

「へえ、この子が。」

私、双子の妹、黒崎^{くろさき}綾^{あや}。宜しくね。」

私は新一君を解放した。

「私、関西から来た奥村 真理絵です。」

私と綾は互いに手を出して握手した。

「奥村さん、遊びに来たんでしょう？上がって。」

「じゃあご遠慮無く。それと、私の事、真理絵って呼んでくれて良いよ。」

「そう。じゃあ、真理絵ちゃんって呼ばせて貰うね。私の事は、綾で良いよ。」

こうして、私たちは直ぐにうち解けた。

が、ご不満なのが一人だけいる。

ま、そんな奴は置いておいて……。

「お邪魔します。」

私は綾ちゃんの家へあがった。

「お、お、おいおい。勝手に入るなって！」

「何、ちゃんと『お邪魔します』言ったよ？」

「そうよ。それに、私が上がる様に言ったんだもん。」

「何か文句ある!？」

私と綾ちゃんの声がハモる。

「な、無いです。」

新一君は小さくなって言った。

「真理絵ちゃん、部屋案内するよ。」

「ありがとう！」

私は綾ちゃんに連れられて綾ちゃんの部屋へ行った。

綾ちゃんの部屋は、広いと言うほどの広さでは無いけど広くて、壁が白く、茶色のベッドにピンクの布団、武術の本がぎっしり詰まった本棚と勉強机があった。

「綾ちゃん、武術の本がぎっしり詰まってるけど、趣味かなんか？」

「うん。」

「何段なの？」

「聞いて驚くな。」

空手と柔道共に10段。」

「全然驚かないけど？」

「じゃあこっち来て。驚かしてあげる。」

私たちは庭へ行った。

庭には、瓦がいくつも置いてあった。それ以外にも、色々な物がある。

「今割るから見てて。」

綾ちゃんはその言って、瓦を数枚積み重ねた。

「はあー！」

「パキパキパキ！」

瓦が全て割れた。

「何だ、そんな事なら私だって。」

そう言って、私は瓦を10枚積み上げた。

「じゅ、10枚!？」

驚く綾ちゃん。

私は、割る準備をした。

「ちょ、ちよっとタオルは？あれ乗せないと痛いよ？」

「大丈夫だよ。見てて。」

そう言っ、私は小指だけを瓦の上に置き、一気に力を込めた。

「バッコーン！」

瓦全て部木っ端微塵。

「なっ！？」

綾ちゃんは驚いて腰を抜かしていた。

「綾ちゃん、大丈夫？」

「悪魔や！悪魔空手26段や！」

綾ちゃんはおかしくなっていた。

（しょうがない、放っておいて帰ろ。）

私は、綾ちゃんには悪いと思ったけど、一人家路に着いた。

黒崎家再び（後書き）

何か、かなり本題と逸れてる気がする。

そろそろどっかで事件起こさないといけないかなあ・・・。

伐山弁護士、まさかの殺人予告!?

「グサッ！」

「いやあああ！」

「プルルルルル！」

「はい、警視庁捜査一課。

・・・ふむ・・・。

何、人が殺されてる!?

それで、現場は!?

・・・。。。

分かった、直ぐに向かう。」

「ガチャ」

2006年9月1日、午後9...30。とある一室で、女性の刺殺体が発見された。

被害者は、現在、芸能界でも人気噴騰中の弁護士、伐山ばつやま和雄かずおの妻、伐山ばつやま恭子きょうこ。

恭子は、生前、ストーカー行為に悩まされており、何度か警察にも顔を出しており、警察内部では、痴漢引き寄せ体質、と噂をされていた。

警察は、生前の被害者を付け回していたストーカー男、高山 洋一氏を恭子殺しの容疑で逮捕した。

事件はそれで終わったかの様に見えた。

が、それは全ての始まりにしかすぎなかった。

また、その後の調査で、洋一にアリバイがある事が解り、事件は振りだしに戻った。

そんな中、事件は再び起きる。

2006年9月4日、午前10:00、私は伐山弁護士の記事発表のニュースを見ていた。

「妻が死んで、本当に、本当に悲しいです。」

伐山弁護士が涙を流しながら言う。

「カシャ！カシャカシャ！」

カメラマンが写真を撮る。

「犯人について、どう思われますか？」

記者が質問する。

「もう、殺してやりたいほど憎いです。」

伐山弁護士は言い放った。

「もし、犯人がこの会場にいたらどうしますか？」

「この手で、絶対に殺します。警察に捕まる覚悟は出ています。」

「ターン！」

画面が切り替わり、右上に小さく、”伐山弁護士、まさかの殺人予告！”と表示され、アナウンサー達が画面中央に横並びに映った。

「聞きました？伐山弁護士の発言。」

「また、大胆な事を発言しちゃいましたね。」

「ブチ！」

私はテレビ画面を消した。

画面は映像が消え、一瞬で真っ黒に染まった。

（何か面白い事無いかなあ・・・。）

そんな事を考えていると、お母さんが部屋に入ってきた。

「真理絵、電話よ。警視庁の警部さんから。」

（警部が？）

私は電話を受け取る。

「はい、お電話換わりました。」

『お、真理絵ちゃん。久しぶりだね。元気してるかい？いや、そんな事よりも・・・。』

警部の声が真剣な声に変わる。

『先日、伐山家で殺人事件が発生したのは知ってるね？』

「知ってますけど、それが何か？」

『その事で、君にお願いがあるんだ。』

「お願い？」

『事件の捜査を協力してほしい。』

「ちょ、ちょっと待って？それって、もう解決したんじゃないんですか？」

『いや、新たな情報が入ったんだ。おかげで事件は振り出しに戻った。』

「なるほど、それで協力を依頼って訳？」

『違う、要請だ。だから、捜査費用はやらんぞ。』

「それは残念・・・。」

『まあ、兎に角、そういう訳だから、一緒に捜査をしてくれないかね？』

「分かりました。では、事件現場で落ち合いましょう。」

「ピッ！」

私は電源を切ると、受話器を置きに部屋を出た。

伐山弁護士、まさかの殺人予告!?(後書き)

ドラマ化するなら、伐山弁護士役は丸山弁護士だ！
この役は彼にしか出来ない！

事件現場

「行ってきました。」

私はお母さんにそう言って、事件のあった現場へ向かった。

「（警部、まだ来てないや。）」

私は外で警部が来るのを待った。

30分後、ようやく警部が現れた。

「すまんすまん、ちよつと道が混んでてのう。」

警部はそう言って頭をペコペコ下げた。

「道ってあんた・・・警視庁は目と鼻の先ですよ？」

私はボソツと呟いた。

「ん、何か言ったかね？」

「いえ、何も。それより、現場を良く見たいんですけど。」

（ふう・・・。）

「お、そうだったな。」

「キンコーン！」

警部はチャイムを鳴らした。

「警部、伐山弁護士は今、取材で留守ですよ。」

「じゃあ、どうしようか？」

警部は静かに考え事を始めた。

私は警部を一人置いて扉の前に立った。

「ガチャガチャ！」

「（やっぱり鍵掛かってるよ。よし。）」

私はポケットに手を入れると、針金を取り出し、鍵穴に挿して適当にいじくり回した。

「カチャ！」

鍵が開いた。

「キューン、カタン！」

私は家の中へ入った。

「(あそこか。)」

私はKEEP OUTの黄色いテープが張られている部屋を見付けると、土足のままその部屋に入った。

「(こうなってるんか。)」

私は部屋の隅々を見て思った。

部屋は、二人分のベッドがあり、それ以外に目立つものは何も無い。つまり、一言で言えばそこは、ただの寝室。

私は寝室に手がかりが無いか探した。

何でもよい。髪の毛一本さえあればそれで良い。

「何も無いなあ。」

私は立ち上がりざまに呟いた。

それもそうである。

何故なら、警察が皆持っていてしまったからだ。

現状保持とか一般市民には言ってるけど、結局は警察が現場踏み荒らしててではないか。

私は警察のやり方に不満を覚えた。

と言うか怒り心頭？

「キューン、カタン！」

「(誰か来た!?)」

私は、人が一人やっと入れるスペースを見つけると、とりあえずそこへ身を隠した。

「何だこの足跡は!?!」

玄関の方から男の驚いた感じの声が聞こえた。

「(足跡?も、もしかして!?!)」

私は恐る恐る自分の足元を見る。

「あ！」

「(!?!)」

私は思わず口を押さえた。

「だ、誰だ!?!誰かそこにいるのか!?!」

そういうと、男は私が隠れている所へ近寄ってきた。

「（バ、バレた！？）」

私はかなり焦り、それと同時に光が差し込んだ。

「誰だ貴様！？」

私は見つかつてしまった。

男は私に向かって拳銃を突きつけた。

「（ここは逃げるか？それとも正々堂々と？）」

私は二つの内一つの選択を求められた。

「殺されたくなければ両手をあげな。」

拳銃如きでサイボーグである私を殺せるとは思えないが、一応言うことに従って両手をあげた。

「ようし、そのままこっちへ来い。」

男は私を引っ張り出した。

「さあ、歩け！」

男は拳銃を突きつけたまま、私をリビングまで押していく。

「ねえ、ひとつ聞いて良いかしら？」

「何だ？」

「あなた、有名な弁護士の伐山さんでしょ？こんな事して大丈夫なの？」

「黙って歩け。」

伐山はそう言って私を突く。

仕方なく私は黙って歩いた。

やがて、私たちはリビングに到着した。

「そこへ椅子を持ってきて座れ。」

伐山は私に椅子をリビングの中央に置く様支持した。

私は何も言わず、そばにあった椅子を持ってきて座った。

伐山は、拳銃を突き付けたまま私の後ろに回り、どこからか縄を持ってきた。

そして、それで私を拘束した。

無駄だろうとは思うけど・・・。

事件現場（後書き）

作者と真理絵の会話

ええ、あ、真理絵ちゃん？

「はい？」

あのさ、何で逃げなかったの？

「だって、もし撃たれたら死んじゃうじゃん。」

何を言いますか。

君はサイボーグでしょ。

「サイボーグだって、拳銃の弾丸には敵わないよ。」
ふっふっふ。

「な、何が可笑しいのよ？」

君は気付いていない。

「ほえ？」

君の体はヒビロノカネで作られている。

「ヒビロノカネ？何それ？」

ヒビロノカネは、世界で一番硬い金属で、ダイヤモンドの刃でも傷付ける事が出来ないんだ。

「へえー。」

だけど、巨大なネオジウム磁石には近付かないでね。

「何で？」

君が金属だからさ。

「なるほど、くっついて離れなくなるって訳だ。」

ご名答！

と言う所で、次回からナレーターさんがナレーションを担当します。

「え、私じゃ駄目なの？」

お前がナレーション勤めたら突っ込む所で突っ込めないからな。

「そんな理由は通らないよ。ナレーターに來るなって言いなさい。」

俺は誰の指図も受けない。

俺がやる事は俺が選ぶ。

忌まわしい事件に感動と涙の終止符を打つ！(前書き)

読む前にハンカチを用意して下さい。

理由は、作者の俺自信が一番知っています。

忌まわしい事件に感動と涙の終止符を打つ！

「伐山さん？」

拘束されている真理絵は声を掛けた。

「何だ？」

「これって、何のつもり？」

「自分に聞いてみる。」

真理絵は今までの事を思い返した。

「解らないわ。」

「とぼけるな。お前なんだろう、妻を殺したのは？」

「はあ！？」

訳の解らない事を言われた真理絵は、目を点にして叫んだ。

「何で私が貴方の奥さんを殺さなくてはいけない訳！？」

伐山は、ポケットから写真を取り出した。

その写真には、亡くなった真理絵の父が写っていた。

「こ、これって！？」

「そう、これはお前の父親の写真だ。」

「な、何であんたが親父の写真を！？」

「1年前にある女が殺人容疑で逮捕された。その時の被害者がこの男だ。」

な、何だって！？

「待って、親父は自殺の筈！」

それは初耳だ。

「それが違うのだよ。」

君の父親は俺の妻が殺したんだ。」

おおよその事は作者から聞いていたが、この二人にそんな繋がりがあったとは、ナレーターの方も知らなかった。

「信じないよ。そんな事、私は信じないよ。」

「それは無理もない。父親の件は、裁判によって自殺と処理された

からな。

生前、君の父親は、不倫をしていた。

それが発覚したのは、父親が自殺した前日の事。

その日、君の両親は、夫婦喧嘩をし、母親は愛想が尽き、君を連れて家出。

そして、翌日に父親は、それを苦に自殺した。

だが、それは俺の妻が計画した事だ。

当時、君の父親は、遺産の相続人を、俺の妻にしていた。

妻はそれを狙って、君の父親を自殺に見せかけて殺し、多額の現金を手に入れた。」

「う、嘘よ！」

伐山は、遺書を出し、開いて見せた。

それには、”全ての遺産の相続人を、伐山 恭子にする”、と、父親本人の字で書いてあった。

真理絵は驚いて声も出なかった。

が、直ぐに平常心を取り戻した。

「貴方にしちゃ出来な推理ね。」

真理絵は、巧く行った、と思いつながらほくそ笑んだ。

「だけど、残念ね。」

「何？」

伐山は顔色を変えた。

「貴方の負けよ。」

ラジオをNHKに合わせなさい。無ければテレビでも良いわ。」

伐山は真理絵に言われるがままにテレビを付けた。

「臨時ニュースです。」

本日、綾瀬川の橋の上から身を投げた男の遺体が発見されました。

男は、先日、伐山の事件で誤認逮捕された高山 洋一氏で、橋の上に遺書が残されておりました。

遺書には、”伐山 恭子を殺害したのは自分だ”と書いてありました。

警察は今後、詳しい調査をして行く方針です。」

伐山はテレビを消した。

「これがどうしたと言うんだ？ どうせ、これもあんたの仕業だろ？」

「・・・・・・・・・・」

真理絵は考え込んだ。

「（9月1日午後9…30、伐山 恭子が寝室で死んでいるのを、帰宅した伐山弁護士が発見した。

死亡推定時刻は、午後9…00。

警察は当初、高山 洋一を殺害容疑で逮捕したが、後でアリバイがある事が解り、釈放された。

そして、その高山が、綾瀬川の橋から飛び下りて自殺した。

現場には遺書が残されていた……。

成る程、読めてきたわ。この事件の裏に隠された忌まわしき事件が。）

「どうした？ 真実を突き付けられて声も出ないのか？」

「いいえ。」

物凄く単純過ぎて声が出なかったただけよ。」

真理絵は言い放った。

「何だと？」

「恐らく、犯行はこうよ。」

時間は1日の朝に戻る。

恭子は、ぐっすりと静かに眠っていた。

そこへ、男が包丁を持って入ってきた。

男は、眠っている恭子の胸に、包丁を突き刺した。

「いやああああ！」

あまりの激痛に、目を覚ます恭子。

「あ、あ……な……た……」

恭子は男に手を伸ばして呟いたが、直ぐに事切れ、手を落とした。

男は、寝室のエアコンを40度の暖房に設定後、オフタイマーを午後9…00にセットしてその場を後にした。

真理絵は大体こんな事を言った。

「そ、それで？は、犯人は誰なんだよ？」

伐山に焦りが見える。

「続きはまだありますよ。」

それは、綾瀬川での出来事。

「話しとは何だ？」

高山に呼び出された男はそう言った。

「俺、見てしまったんだ。」

高山は笑いながら言った。

「何をだ？」

「あんたが恭子を殺す所をだよ。」

あの日、俺は隣の空き家で恭子の寝ている姿を監視していた。

そしたら、あんたが恭子に包丁を刺した。

警察にバラされなくなったら、全財産を俺に寄越しな。」

男は、クロロフォルムを染み込ませたハンカチを、高山の鼻に当てがった。

「うっ!？」

高山は、眠くなって眠ってしまった。

男は、嘘の遺書を置き、高山を落とした。

そして、その場を去った。

「で、犯人は誰なんだよ？」

「伐山さん、犯人は・・・貴方よ。」

「ハッハッハ、こいつは傑作だ。俺が犯人だ、と？」

笑わせるな。」

伐山は笑って言った。

「事件の背景は1年前に遡る。」

真理絵が言くと、伐山は真剣な顔をした。

「1年前、恭子さんが遺産目当てで私の親父を殺害し、裁判に掛けられた。半年後、何も知らない貴方は、裁判で無罪を勝ち取った。

そして今回、事実を知った貴方は、恭子さんが眠っている間に刺殺

した。

が、それを高山さんに見られ、口封じの為に、彼を橋から落とした。そうなんですよ？

真犯人の、伐山 和雄さん。」

真理絵は真相を語った。

「良く解ったな。

ついでだから聞こう。

動機を答えてみる。」

「動機？

あの写真、貴方にそっくりですよ。

貴方、奥村 和彦と言う双子の兄がいるわね？」

「……………」

「私の親父、旧姓が伐山なの。ここまで言えば、私の言いたい事、解るわね？」

「……………」

「確認の為に一応言うけど、恭子さんを殺害した動機は、私の親父・・つまり、貴方の兄、和彦が殺された事の復讐でしょ？」

「流石だ。

だが惜しいな。

君の父、和彦は俺自信だ。」

「ほえ？」

「1年前殺されたのは、弟の和雄だ。

和雄は、俺の身代わりになって、死んだんだ・・。」

衝撃的真相発覚に真理絵は驚くと、急に悲しくなって涙した。

「今縄を解いてやる。」

真理絵を縛り付けていた縄をほどいた和彦は、涙を堪えながら、ゆっくり玄関へと歩いて行った。

が、それを真理絵が制した。

「パパ！」

真理絵が叫ぶと、和彦が振り向いた。

真理絵は、和彦に抱きついた。

「行かないで！」

やっとパパに会えたのに、また離れ離れになるなんて、嫌だよ私。お願いだから、ずっとそばにいて！」

真理絵は泣きながら言った。

「でも俺は・・・。」

「お願い！」

自首なんか、自首なんかしないで！

今回の事なら、私が何とかするから！

だから、だから、だからずっと側にいて！

本当は、本当はいけない事だって分かってる。

でも、でもパパには、家に帰ってきて欲しいの！

パパのいない生活なんて、私には耐えられないよ！」

真理絵は、心の底から込みあげてくる気持を全て吐き出した。

「真理絵・・・。」

和彦は、真理絵を、ギュッと抱きしめた。

その後、真理絵は警察に行き、高山が真犯人だ、と言う嘘の推理をし、事件はストーカー男の高山が恭子を殺し、綾瀬川の橋から飛び降り、後追い自殺をした、と言う事で丸く納めてしまった。

その晩、真理絵は部屋に籠り、朝まで一晩中泣き続けたと言う。

忌まわしい事件に感動と涙の終止符を打つ！（後書き）

感動と涙の悲しい結末でした。

これを書いてる時、真理絵の感情を直に受けてしまい、俺自信まで泣いてしまいました。

おかげで、自首させるつもりが、こう言う結末になってしまいました。たことをお詫び申し上げます。

新型メカ

真理絵は、休日を利用して知り合いの博士の家に遊びに来ていた。

「グイーン！バチバチッ、バチッ！」

と、音がしたり、火花が散ったりしていた。

気になった真理絵は、博士に声を掛けた。

「博士、何を作っているんですか？」

「君に新しいメカを作っているんじゃない。」

白衣を着用し、小太りで顔がコアラみたく、眼鏡を掛けた名探偵コ
○ンのそれに似た男が言った。

「よし、此処を調整すれば、と。」

「カチカチ、カチ！」

「これで完成じゃ。」

「何これ？」

ただのベルトじゃない？」

後ろで様子を見ていた真理絵が言った。

「ふっふっふ、これはただのベルトでは無いのだよ真理絵君。」

博士は自慢げに言った。

「で、どんなベルトなの？」

「それは実際に使いながら説明しよう。」

はい、ベルト付けて。」

博士はベルトを渡した。

真理絵は受けとると、言われた通りに、腰へ巻いた。

「ピカーン！」

真理絵の体が光だした。

「な、何これ！？」

真理絵は驚いた。

「成功じゃ、成功じゃぞう！」

博士は大喜び。

「だから、何なんですか!？」

真理絵は問う。

「それは、大喜びの博士に代わって、この名探偵が答えよう。」
「ちょっと作者さん!？」

何出ちゃってんですか!？」

真理絵は、突然の声に驚いて振り向いた。

「ど、どちら様？」

真理絵は聞いた。

「天の道を往き、総てを知る男・・・天道 てんどう 総知だ。」
突然現れた謎の男は、軽く自己紹介をした。

「で、これは何なの？」

「それは、君の全身をヒイロノカネで出来たアーマーで、瞬時に身を包む為の完全防御型システムだ。

作動させる時は、『装甲』と叫べ。」

「装甲？」

真理絵がそれを口にすると、ベルトからアーマーが瞬時に形成され、真理絵の全身を隙間なく完全に包んだ。

その姿は、仮面ライダーカ〇トの、マス〇ドフォームのそれに近かった。

実はこれ、博士がカ〇トの大ファン、と言う理由から来ている。

「どうやら、巧く形成された様じゃな。」

博士が呟いた。

「で、どうやったら戻るの？」

「ベルトを外すか、『キャストオフ』と叫ぶのじゃ。」

「キャストオフ？」

「ドフィューン！」

真理絵が口にした為、アーマーが瞬時に吹き飛び、真理絵の生身が現れた。

「うわ！」

博士は素早く伏せた。

「いきなり飛ばす馬鹿がどこにおる!？」

博士は激怒した。

「私のせいじゃないわ。

それより、ありがたく貰っておくわ、これ。」

真理絵はそう言って、家を出ていった。

こうして、真理絵は、新しいメカを手に入れた。

新型メカ（後書き）

ついに、仮面ライダーカ〇トまで敵に回してしまいました。
この先、一体どうなるのだろうか？

作者と真理絵ちゃんの雑談

「ねえ、作者さん。」

どうした？

「何で出て来たの？」

しかも、天の道を往き、総てを知る男・・・天道てんどう 総知そうじって・・・。

」

それは、どうだってよいだろ。

「そう。」

じゃあ次、あのアーマーはどう言う仕組みでくっついてるの？」

それは、ファンデルワールス力と言う電氣的な力で接着してあるんだ。だから、簡単に吹き飛ばせる。

「何でそんなシステムを？」

ナレーターさんにどうしてもやれと言われ！？

「ゴチーン！」

「作者さん！」

私はそんな事は言ってます！貴方がやるって言ったんでしょが！」

あ、いや、逃げるが勝ち！

作者は、目にも留まらぬ速さで逃げ出した。

作者は、99999Exp手に入れた。

レベルが∞になった。

HPが∞になった。

MPが∞になった。

力が ∞ になった。

守備力が ∞ になった。

速力がマックスになった。

1,000,000,000円を拾った。

真理絵がサイボーグになった経緯

数ヶ月前の大阪。

「キンコンカンコンコン」

放課後のチャイムが鳴る。

「起立、気をつけ、礼、着席！」

日直の生徒が元気良く号令をかけた。

「えーと、特に連絡事項は無いんやけど、もうすぐ、待ちに待った夏休みや。」

夏休み入ってから、事件、事故に巻き込まれぬ様、気をつけておくんなはれ。

では、解散！」

先生の話が終わると、生徒が一斉に下校を始めた。

「由香ちゃん、一緒に帰ろう？」

下駄箱前で一人の少女が由香に声を掛けた。

由香は、良いよ、と答えた。

二人は学校を後にすると、ゆっくりと家を目指して歩き出した。

「あ、信号変わっちゃう！？」

由香は、点滅を開始した信号を、急いで渡ろうと、少し離れた所から走り出した。

が、由香が交差点に進入した瞬間、信号の点滅が終わり、赤に変わってしまった。

「プッ、プー！」

「由香ちゃん、危ない！」

少女は叫んだが、時既に遅し。

由香は猛スピードで走ってきたトラックに跳ねられ、数メートルほど吹っ飛んだ。

由香を轢いたトラックは、そのまま行ってしまった。

「由香ちゃん！？」

少女が駆けつけてきた。

「由香ちゃん、しっかりして！」

少女は必死に訴えかけるが、由香は意識を戻さない。

「ピーポーピーポー」

程なくして、救急車が到着し、由香は救急車に乗せられ、病院へ運ばれたが、まもなく息を引き取った。

それを知った東京の博士は、これだ、と思い付き、急いで大阪の病院へ向かい、遺体を引き取るとすぐに引き返した。

そして1年前、東京でも同じ様な事故が起きていた。

和彦が自殺をし、その娘の真理絵が、父の後を追うために、車の前に飛び出して後追い自殺を図ったのだ。

幸い、命だけは助かったが、意識不明の重体で、1年経った今でも生死の境を彷徨っている。

そこで博士は、大阪の病院から引き取った遺体を改造し、自慢の腕でサイボーグに作り変えた。

が、これだけではピクリとも動かないのである。なぜなら、由香本人が死んでいるからである。

では、どうするか？その答えは簡単だ。

博士は、真理絵が入院している病院へ行き、ドクターと交渉をし、由香と瓜二つの真理絵の体を引き取ると、研究室へと連れ帰ったのである。

そして、博士は真理絵の体を意識転送マシンAに入れ、由香の体をマシンBに入れた。

これが巧く行けば、真理絵はサイボーグとして復活を遂げるだろう。

「カタカタカタカタ」

博士は、意識転送マシンに繋がったパソコンのキーボードを叩く。すると、意識転送マシンが起動し、真理絵の意識がマシンBに入っている由香の体へ転送された。

転送が完全に終了すると、マシンBのフタが開いた。

博士は、由香・・・ではなく、真理絵の体をマシンBから出し、

電源を入れて起動させた。

「ん．．ん．．ん。」

真理絵が1年ぶりに目を開けた。

「こ、ここは？」

真理絵が最初に放った言葉はそれだった。

博士は、真理絵に声を掛ける。

「わしの研究室じゃ。」
と。

「は、博士．．．。」

真理絵は博士を見ると、そう呟いた。

「博士、ウチ、どんくらい眠った？」

「約1年じゃ。」

「そうなん？」

ウチ、さっきトラックに跳ねられて、それから．．．。」

それは由香の記憶である。

と言う事は、博士の生態実験は失敗に終わったのか？

しかしそうでは無かった。博士はこれで成功だと言うのだ。

ゴチャゴチャ言うところの場合やあれへん、要は真理絵と由香の両方の記憶を持つとるっちゅう事や。

確認の為、1年前に何があったのかを、博士は真理絵に聞いた。

真理絵は、父の後を追うために道路に飛び出して後追い自殺をした、と証言した。

これで、博士の生態実験が成功したと言う事が証明された。

博士は、一人喜んで舞い上がった。

真理絵がサイボーグになった経緯（後書き）

なるほど、だから真理絵は、由香と真理絵の二人の記憶を持っているから関西弁をしゃべれたのか。
これでまた一つ謎が解けた。

真理絵危うし!?

$$\begin{bmatrix} Z \\ Z \\ Z \\ Z \\ Z \\ Z \\ Z \\ Z \\ Z \end{bmatrix} \cdot \begin{bmatrix} \cdot \\ \cdot \\ \cdot \\ \cdot \\ \cdot \\ \cdot \\ \cdot \\ \cdot \end{bmatrix}$$

真理絵が授業中に居眠りをしていると、先生が起こしに来た。

「起きろ。」

先生はそう言ったが、真理絵は起きなかった。

「甘いな。」

派手な服装の亀山が言った。

「何？」

先生は振り向いた。

「そいつはこうやって起こすんだ。」

亀山は立ち上がると、真理絵の下へ来て、真理絵が寝そべっている机を蹴り飛ばした。いや、蹴り場そうとした。が、危機を察知した真理絵が、起きて亀山を一瞬でのして気絶させ、また眠った。

皆は何が起こったのか分からない。何故なら、真理絵が動いたのが、0.001秒間と言う1秒間の $\frac{1}{1000}$ の間だからだ。

簡単に言うと、速すぎて肉眼では捕えられなかった、と言う事だ。

「おい、
どうした？」

倒れた先生は亀山に声を掛けた。

が、返事は無い。それは、そうである。亀山は、気絶しているのだ。

「机を蹴ろうとした罰よ。」

真理絵は寝ながら呟いた。

「キンコンカーンコン」

そんな事をしている合間に、授業は終りを告げた。

「あ、それじゃ、あれ、宿題な。」

先生はそう言って、黒板を差した後、亀山を担いで保険室まで行つた。

真理絵は、

「ふわあ ああ、良く寝た。」

と、起き上がり様に伸びをしながら言った。
ちよっと待った。

此処で、一つの疑問が生まれる。サイボーグは、寝るのか？
その通り、寝るのである。

サイボーグと言っても、所詮は人間だ。眠って体力を回復しなくては、死んでしまうのだ。

「真理絵、帰ろうぜ。」

帰り支度を終えた新一が、真理絵を誘った。

真理絵は振り向き様に

「うん。」

と、笑顔で答えた。

真理絵は、直ぐに支度をする、新一と二人で下駄箱まで歩きだした。

「真理絵。」

新一が声を掛けた。

真理絵は、何、と答える。

「こ、これからさ、ど、どこか遊びに行かない？」

新一は赤面しながら言った。

「うん、行く！」

真理絵は餓鬼っぽく喜びながら言ったのも束の間、亀山が二人の前に現れた。

「お前か、何の用だ？」

真理絵と新一がそろって言う。

二人は顔を合わせると、クスクス、と笑った。

「何が可笑しい!？」

亀山は激怒した。

「何の事？」

再び揃う声。

「とぼけるな! 今笑っただろ!？」

「はあ!？」

誰もお前の事なんて笑って無いぞ。」

「まあ良い。」

それより、さっきは良くもやってくれたな？」

亀山は真理絵に向かって言った・・・ん？

こいつ、あの動きを肉眼で捕えたのか？

「何？私がかした？」

真理絵は歩み寄る亀山に言った。

「この俺様の腹にパンチをした。」

ちよつと来い！」

真理絵は、亀山に屋上へ連れて行かれてしまった。

「私をこんな所へ連れてきて、どうするつもり？」

「殺してやる。」

亀山はそう口にした。

立場逆転！？真理絵の奴隷！

亀山は突然殴り掛かって来た。

「カン！」

金属に物がぶつかった音がした。

その後も、亀山は殴り続けた。

「カン！カン！カン！カン！カン！カン！カン！」

高い音が連続で鳴り響く。

「ピシッ！」

真理絵が隙を付いてデコピンをした。

「ヒューン、ダン！」

亀山は後ろに飛んでいき、フェンスにぶつかった。

「コノヤロー！」

亀山は走ってきた。

「タ、タ、タ、タ」

亀山は、近くまで来ると、軽く跳ねて蹴りをした。

流石にこれには耐えられなかったのか、真理絵は後ろに転がった。が、無傷に変わりはない。

「全然痛くないわよ？」

もっと本気でやったら？」

真理絵は中指を立てて亀山を挑発した。

亀山は、顔中を真っ赤にし、頭から湯気を出した。

完全にぶちギレたのである。

ぶちギレた亀山は、ポケットから十手を取り出した。

「死ねえ！」

亀山は十手で真理絵の頭をぶっ叩いた。

「グニョン！」

十手がゴムの如く、曲がってしまった。

「嘘だろ！？」

亀山は驚きながら、十手を直そうと必死になった。
が、十手は硬く、亀山の手では直せなかった。

「あらまあ。物は大事にしなきゃ、ダ、メ、よ？」

真理絵が喋ると、ピンク色でキラキラ光る背景に包まれたが、直ぐに元に戻った。

「これでどうだ!？」

亀山は、起き上がり様に、ポケットから折りたたみナイフを出した。

「やれやれ。」

真理絵は呆れていた。

勝てない相手に、どうしてそこまでムキになるのか、と。

「死ねえ!」

亀山は真理絵の胸にナイフを突き刺した。

「パキン!」

ナイフの刃が折れてしまった。

「なっ、どうなってんだよ!？」

亀山は驚いた。

「あら？」

刃が折れちゃったの？

とても錆びていたのね。」

「黙れ化け物!」

亀山は回し蹴りをした。

「カーン!」

「いってえええ!」

亀山は悲痛な叫び声をあげた。

「亀山君？」

人を化け物扱いしちゃ、ダ、メ、よ?」

またピンクの景色に包まれた。

「う、五月蠅え! 寄るな化け物!」

亀山は後退りしながら、歩み寄る真理絵に言った。

「プチン!」

真理絵の堪忍袋の緒が切れた。

「もう怒ったわ！」

そう言って、真理絵は亀山を本気でぶん殴った。

「ヒューン、ダン！」

亀山はフェンスにぶつかった。

真理絵は、目にも留まらぬ速さで近付き、亀山の腹にパンチを入れた。

「がはっ！」

亀山は口から血を吐いた。

その血が、返り血となって、真理絵に掛かった。

「き、汚いわね・・・。」

真理絵は顔を引き釣らせながら言うと、再び腹をパンチした。

「がはっ！」

亀山は再び血を吐いた。

「血吐くな！」

「ブン！」

真理絵は最大パワーで、亀山の顔面を殴った。

亀山の顔面に、黒くて丸い痣が出来た。

た。

真理絵は、更にもう一発お見舞い。

顔面に黒い痣が出来た。

そしてもう一発、更にもう一発、更に更にもう一発。

おかげで、亀山の顔面は痣だらけである。

「パンパン！」

「スッキリした。」

真理絵は手を叩くと、振り返って戻ろうとした。

「待て。」

亀山が止めた。

真理絵は振り向き様にこう言った。

「まだやられたいの？」

恐い、怖すぎる真理絵。

亀山は土下座をして言った。

「俺が悪かった、ゴメン！何でも言う事聞くから、許してくれ！」
真理絵は少し考えるところ言った。

「そうねえ。」

じゃあ、働きアリとして、一生私に仕えなさい。」

人の自由を奪って、自分の為に働かせる。

それは、いくらなんでも、酷すぎである。

「はい、解りました。真理絵さん。」

「ズシッ！」

真理絵は土下座をしている亀山の頭を踏み潰した。

「さん？様じゃなくて？」

「も、申し訳ありません、真理絵様。」

「宜しい。」

真理絵は足を退けた。

この時、亀山が屈辱を味わったのは、言うまでも無い。

立場逆転！？真理絵の奴隷！（後書き）

ユーリさんの要望に答えて、前回、新一を出しました。

にしても、亀山を真理絵の奴隷にするのは、流石に殺りすぎでしたかな？

さて、次回は銀行が襲撃されます。

一体、真理絵はどう立ち向かうのか？

銀行強盗誘拐殺人事件！

10月序盤、真理絵は、事前に水理銀行から依頼を受け、張り込み捜査を行っていた。

とは言うものの、実際に張り込みをしてるのは、奴隷の亀山かめやま 大輝だいきな訳で……。

「クソッ、何で俺があんな女の言うなりにならずにゃいけねーんだよ!？」

「ドン!」

大輝は壁を叩いた。

コラコラ、本人が聞いてたらどうするんですか？

「大輝、あんな女って、私の事かしら？」

真理絵が突然現れた。

「（ギクッ!?!）

嫌だなぁ。真理絵様の事じゃないですよ。」
丸つきり嘘である。

「（つたく、この女、何処から現れたんだ?）」

何処からって、普通に走って来ましたけど?

あ、そうか。最高速度は肉眼では捕える事が出来ないんだ。

通りで、大輝が気付かない訳だ。

「パアン!」

一発の銃声が銀行内に響いた。

強盗か? いや、従業員が一人、殺された様だ。

「今みたいになりたく無かったら、この袋に金を詰めろ。」

覆面男が、カウンター越しで女性従業員に、銃を突き付けながら、大きな袋を渡した。

女性従業員は、黙って袋に、金を詰め込んだ。

「パアン!」

あまりにもモタモタしていたので、イライラした男は、その従業員

を銃殺した。

その後、その男は袋を置いたまま逃げて行った。

「キャア!？」

真理絵が外で見張っていると、突然、二人組の覆面男に襲われた。恐らく、例の強盗の一味だろう。

真理絵は、男らに抱えられ、車に乗せられた。

その時、真理絵は現場にある手掛かりを残した。

その頃、銀行内では。

「おいクソ女！」

大輝が真理絵を呼んだ。

来る筈が無い。

変に思った大輝は、外に出てみた。

しかし、外にも真理絵はいなかった。

「(変だな。)」

大輝は思った。

「ん？」

大輝は何かを発見した。

「(このウサギの絵のサイフ、あの女のだ。

捜して届けた方が良いよな?

待てよ、少しくらい……。)」

何を考えてるかと思えば、金を盗む気ですか。

バレたら命無いよ? 私は知らんけど。

大輝は、真理絵のサイフのフタを開けた。

中に手紙が入っていた。

『大輝、私は強盗に捕まった。

私を助ける。

強盗の車のナンバーは、足立区33、あ、50-10だ。』

情報が少なすぎる。これでは動き様が無い。

「馬鹿馬鹿しい。」

大輝は、紙を破って捨ててしまった。

「ん？」

大輝は、もう一枚紙を見付けた。

『破いたな。まあ良い。兎に角助けに来い。』

大輝は辺りを見回した。

「ま、まさかな。」

大輝は呟いた。

が、内心は不安だった。

どこかで見ているかもしれないと。

恐怖の破壊魔真理絵（前書き）

こんな探偵嫌だ。

恐怖の破壊魔真理絵

「さっさと歩け！」

覆面男は真理絵を突いた。

「いったーい。」

何するんですか？」

真理絵は痛そうに言った。

「カチャ」

覆面男は銃を突き付けた。

「そんな事して、どうするつもり？」

「パン！」

覆面発砲した。五月蠅いから気に障ったらしい。

「カン！」

弾丸は、ヒビイロノカネで出来た真理絵にダメージすら与えず。

「あ、兄貴。こいつ、化け物ですぜ。」

覆面をした弟分が言った。

「取り敢えず、監禁だ。」

兄貴分は、真理絵を倉庫に押し込んだ。

「お前達、私をどうしようと？」

「そうだな。身代金でも要求するか。」

そう言う訳だ。自宅の住所と電話番号を教えろ。」

「東京都足立区水理6-32-1

電話が、03-1532-0000。」

真理絵ちゃん、誘拐犯に教えちゃって良いんですか？

「おい、貴様！」

何故俺の住所と番号を知ってる！？」

成る程、事前に調べてたって訳か。恐るべし、真理絵様。

兄貴分はそれに驚いた。

「カチャ」

「答えろ！」

「あの、何を答えれば良いんですか？ 貴方の名前ですか？ 貴方の名前は星異岳ほしただけ 兼雄かねおでしょ？」

因みに、水理銀行の従業員二人を銃殺したのも貴方ね。」
名前を知っている真理絵に、男は驚いた。

「それで、そちらは共犯の黒田くろだ 正和まさかず。」

貴方、自分の勤める銀行襲って、何考えてるんですか？
弟分は驚いた。

その時だった。

「真理絵様、お助けに参りました。」

「大輝。来てくれたんだ。」

「真理絵様の為なら、例え火の中水の中、どこへだって行きますよ。
(クソ、何で俺がこんな事！？)」

二人が話していると、星異岳が割って入った。

「取り込み中悪いが、二人とも死んで貰おう。」

星異岳は、ロケットランチャーを二人に向けて構えていた。

「どうぞ、やれば？」

振り向いた真理絵が、星異岳に言った。

「ま、真理絵様！？」

驚く大輝。

「ほお、死ぬのが怖くないのか？」

「別に、私は一度死んでるから、全然怖くないわよ。」

「そうか、ならば死ねえ！」

「ドッカン！」

星異岳はロケットランチャーを発射した。
ミサイルが物凄いスピードで飛んできた。
が、真理絵は微動だにしない。

「真理絵様、逃げないのですか？」

（いっそ、このまま死んでくれ。）

「目の前なのに、避けられると思う？」

真理絵の言う通り、ミサイルは目の前に迫って来ていた。

これでは避けられる筈が無いが、何を隠そう、真理絵はサイボーグ。不可能は無いのである。

「装甲。」

その瞬間、真理絵の体は、アーマーで包まれた。

「ズドン！」

ミサイルが真理絵に当たって爆発を起こした。

同時に、大輝も爆発に巻き込まれ、爆裂霧散。

大輝様済みかよ！？

煙が晴れると、アーマーに包まれた真理絵が立っていた。

「キャストオフ。」

「ドフィューン！」

アーマーが吹き飛び、二人の覆面に当たった。

二人の覆面は、息耐えた。

「ドカーン！」

先ほどの激しい戦いにより、倉庫の火葉が爆発。アジトもろとも全て吹き飛ばした。

当然、真理絵も爆風で吹き飛ばされた。

「ヒューン、ズドン！」

真理絵は、水理高校の体育館の屋根に突っ込んで体育館全体を破壊した。

こうして、銀行強盗誘拐殺人事件は解決した。

だが、払った犠牲も大きかった。

恐怖の破壊魔真理絵（後書き）

真理絵に関わった者は、必ず死にます。町で出会ったら逃げましょう。

それより、ハジケ過ぎて本題からかなり脱線しています。

次回はまじめにやります。
では。

第3章：今度の殺人事件は真面目っデース！

「新一君、昨日は遊べなくてごめんね。」

真理絵は、昨日の一件で遊ぶ事が出来なかった。

「しょうがないよ。大事件だったんだから。」

「うん、本当にごめんね。」

「そんなに何回も謝らないで良いよ。」

「でもそれじゃ、私の気が済まないよ。」

「そうだ、明日遊びに行こう。待ち合わせは昨日の場所。時間も同じよ。」

真理絵はそう言って、新一と別れた。

「（一方的だな、あいつ。）」

新一は思った。

翌日、真理絵は、待ち合わせ場所で新一を待っていた。

「（新一君遅いなあ。）」

「新一なら来ないぜ。」

突然の男の声に、真理絵は振り向いた。

「よっ。」

「貴方は!？」

「久しぶりだな。新型メカ以来だぜ。」

「新型メカ？」

天道 総知？

ああ、作者さん！

ちよっと、また出ちゃってるよ!？

もう、作者さんはやりたい放題だな。

「で、来ないって、どう言う事？」

真理絵は天道に聞く。

「新一、此処へ来る途中に、事故に遭ってな。病院に運ばれたんだ。」

「え、新一君が事故に!？」

真理絵は驚くと、急に暗くなって涙した。

天道はハンカチを差し出した。

「サイボーグが泣くな。」

「・・・でも。」

「でもない。泣くのは、彼が死んだ時だけにしな。」

「・・・生きてるの？」

「誰が死んだなんて言った？」

「それ聞いて安心した。」

それで、新一君は何処の病院にいるの？」

天道は、水理病院、と答えた。

真理絵は礼を言うと、目にも留まらぬ速さで病院へ向かった。
所で、何故作者さんが出たのでしょうか？ちよつと聞いてみましょう。

『作者さん、ナレーションやってるナレーターです。』

何故、今回も出たのですか？」

「ナレーターが知る権利無し！」

天道はそう言い残し、目にも留まらぬ速さで真理絵を追った。

あいや、見事にスルーされました。

さてさて、病院の方はどうなっているでしょうか？

「コンコン！」

「どうぞ。」

院長は言った。

「ガチャ」

何者かが院長室に入った。

「カチャ」

何者かは、院長に銃を突き付けた。

「パン！」

何者かは発砲、頭部を銃弾が貫通し、院長は亡くなった。

何者かは、拳銃を遺体に持たせた。

同時刻、新一のいる部屋には、真理絵と天道が見舞いに來ていた。

「良かった、大した事無くて。」

「悪いな、心配掛けて。」

「心配なんかして無いから安心して。」

真理絵は、そう言った。

「心配しろよ、おい。」

「パァン！」

付近で銃声がした。

「今のは!？」

「銃声だ！」

真理絵と天道は、銃声のした方へ急いで向かった。

「新一は、動くな！」

と、新一に言い残して。

第3章：今度の殺人事件は真面目っデース！（後書き）

えっと、この回からレギュラー出演する事になりました、天の道を往き、総てを知る男・・・天道^{てんどう} 総知^{そうち}こと作者の謎の名探偵です。真理絵の兄役として、精一杯頑張ります。

「作者さん、天道って真理絵ちゃんのお兄さん？」
あ、何故それを！？」

「今自分で言ったでしょうが。」
そうだった？

と言う事で次回は、真理絵の過去に纏わる話をやる。

「「「やんねえよ！」」「」」

院長殺人事件！

「ドンドンドン！」

「先生！？先生！？」

ドクターが呼び掛けるが、返事はない。

「どうしたあ！？」

騒を聞き、天道と真理絵が駆け付けて来た。

「さっき、銃声が聞こえて。」

「どけ。」

天道は、回し蹴りを放った。

「ズドン！」

扉が木っ端微塵になった。

「せ、先生！？」

ドクターが入ろうとしたが、天道が制した。

「入ってはいけない。」

と言いつつ、部屋に入る天道。

「「自殺か・・・。」」

天道と真理絵が同時に言った。

二人の目が会う。

「あの、先生は！？」

「「残念ですが、亡くなっています。」」

再び二人の声が重なる。

「あの、二人一緒に言わなくても・・・。」

全く、その通りである。

「そうだな。」

俺は警視庁特別捜査課の天道 てんどう 総知だ。 そうじ

あんたの話を聞かせてもらおう。」

そう言って、天道は警察手帳・・・いや、黄金 きんの警察手帳を見せた。
この手帳は、特別な事件を捜査をする者に与えられる、世界に一つ

しか無い貴重な警察手帳だ。

中央に、警察のトレードマークが付いており、その下に、警視庁、と縦に書かれている。

ぶっちゃけ言えば、普通の警察手帳を黄金色に塗っただけだ。

また、特別捜査課は捜査にどんな手段を取っても許される。

「あんたの話を聞かせて貰う。

いや、その前に名前を聞かせて貰おうか。」

天道はドクターに言った。

ドクターの名前は、小島こじま 勝男まさお。水理病院の副院長である。

彼の証言では、銃声が聞こえる前は、トイレに行っており、銃声が聞こえたので慌てて駆けつけて来たと言う。

「それで、他に気づいたことは？」

「いいえ、特に・・・。」

「ねえ、刑事さん。」

真理絵が呼んだ。

「どうした？」

「見て、この指輪。」

真理絵は、院長がしている指輪を指差した。

真理絵が差した指輪は、少し妙だった。

「何だ、”指貫”じゃないか。」

「サシヌキ？」

ゆびぬき
「指貫だ。」

小島、院長は裁縫をやるのか？」

天道は小島に聞いた。

「ええ、趣味で仕事の合間にやっていますけど・・・。」

「・・・。」

天道は考え込んだ。

「（指貫、裁縫、これなら誰にでも密室は作れるが、肝心の鍵が見つかからないんじゃないか・・・。）
んあ？」

「あのさ、さっきから呼んでるんだけど？」

真理絵は呆れながら言った。

「すまん。で、また何か見つけたのか？」

「これ。」

真理絵は鍵を渡した。

「これ、何処に？」

「院長さんのポケットに入ってたよ。」

「ポケット？」

「うん。」

「どう言う風に入っていたんだ？」

「こう言う状態。」

真理絵は鍵を天道のポケットに押し込んだ。

天道はポケットに手を入れる。

「んっ!？」

（無理だ、裁縫糸で密室なんて無理だ。）

「刑事さん。」

真理絵が天道を呼んだ。

天道は振り向いた。

「私、密室の作り方解っちゃった。」

「何？」

真理絵は、裁縫セット見付けると、糸と針を取り出した。

天道はその様子を、腕を組んで眺めた。

真理絵は、糸を針に通し、被害者のポケットに刺した。

「待て。」

突然、天道が声を出した。

「それじゃ、密室は作れない。」

「ほえ？」

「どうして？」

天道の言葉に対して真理絵はそう言った。

「鍵、ちゃんと入っていたんだろ？」

「あ、そっか。じゃあ、どうやって？」

「合鍵だ。」

「合鍵？」

「そう、犯人は・・・っ!？」

（俺はここへ来てとんでもない勘違いを!？）

この部屋って、密室じゃなかったんじゃないのか!？

思い出せ、俺たちが駆けつけてきた時の事!」

天道は静かに思い出した。

「（そうか、解ったぞ!）」

天道はにやりと笑った。

「ど、どうしたの？」

「解ったんだよ。」

俺たちは犯人にはめられたんだ。」

「どう言う事？」

「それは、直接犯人に聞こう。」

聞かせてもらうぜ、小島。」

天道が小島の方を振り向きながら言うと、小島の顔色が急変した。

どうやら化けの皮がはがれたようだ。

「たった今、総てが解った。」

銃声が鳴った時、あんたは慌てて駆けつけて来たと言ったが、あれ

は恐らく嘘だ。」

「お、おいおい、冗談だろ？」

「冗談なんかでは無い。院長を殺したのはお前だ、小島。」

お前は、事件当時、院長室に入り、院長に向かって銃を発砲。その後、お前は院長に銃を握らせ、部屋の外へ出る。そして、俺たちが駆けつけて来たのを良いことに、扉を叩いて院長に声を掛けた。

当然、俺たちはそれを見て、密室だと思う。だが、実際はそうではない。鍵が開いていたんだ。」

「密室じゃないって事は良く解った。だが、犯人が拳銃を持っていたら、いくらなんでも気づくだろう。」

「それがそうでも無い。被害者は気づくことができなかったんだ。これがその証拠だ。」

天道は被害者の指貫を見せた。

「小島、つめが甘かったな。」

あの時、被害者は裁縫をしていた。気づける筈が無いんだ。」

「待て。確かに、あの時、院長は裁縫をしていた。」

だが、犯人でもないあんたが、なぜそれを知っている!？」

「ほお、罪を認めるのだな？」

「俺は殺したとは一言も。」

いや、言ったと思うぞ？

「『確かに、あの時、院長は裁縫をしていた。』」

天道は小島が言った事をそのまま言った。

小島は力が抜けたかのようにその場で膝を付いた。

「あいつが、あいつが悪いんだ。俺の妻を殺しやがって。」

「だから、院長を殺した、と？」

「そうだ、俺があいつを殺して何が悪い!？」

「ブン!」

天道は小島を殴った。

「俺も1年前に親父を殺されている・・・。」

お前の気持ちは良く解るが、それでお前の奥さんは喜ぶのか？」

「喜ぶと思うぜ。だってよ、自分を殺した犯人を殺してくれたんだ。喜ばない奴が何処にいる。」

「お前よ、今までどんな人生経験をしてきた？」

親父が言っていた。

人を殺す者はろくな人生を歩んでいないってな。」

「ふっ、俺はろく人生を歩んできたさ。俺にとって、最高の人生をな!

お前に俺の気持ちは解るかあ!？」

小島は立ち上がると、ナイフを取り出した。

「グサッ!」

小島は自らの胸にナイフを刺した。

「うっ・・・うっ・・・うっ！」

小島はその場に倒れ、息を引き取った。

「小島あ!？」

天道は叫んで涙した。

院長殺人事件！（後書き）

誠に勝手ながら、これで完結です。
今までありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9016a/>

サイボーグ探偵真理絵（Cyborg detective MARIE）

2010年10月9日04時47分発行